

伊藤光中の『とりかへばや』本文校訂態度

新居 和美

はじめに

『とりかへばや』の研究史は近世期から始まったと考えるとよい。そして、初期の研究の跡は、写本として伝わる伝本に書き入れられた注記という形で表れている。諸本を眺めて最も目につくのは、諸本分類の一翼を担う俊明本系統の注記に表れた研究である。これは山岡俊明の手によつて注記が施された写本が基であるが、転写の過程で注が増補されたもの、削除されたものなど様々な形態の俊明本が生じており、以後の『とりかへばや』研究に与えた影響は大きい。また、本居宣長・春庭門下の手になる写本群にも注解作業の跡が見受けられるし、他にも誰の手によるか判明しない注記を有する写本は数多くみえる。近世期において少なからず『とりかへばや』の研究が行われていたことが窺える。それらの中で、近世期における研究の到達点を示すものとしては伊藤光中¹⁾による東海大学付属図書館蔵桃園文庫本(以下、光中校訂本と称す)をおいて他にはあるまい。

伊藤光中は俊明本や本居宣長・春庭門下の写本を含む複数の写本を用いて校合・集注した静嘉堂文庫蔵四冊十行本(松井文庫本D)(以下、光中校合本と称す)を作成し、それを基として光中校訂本を完成させた。よつてこの本には俊明本系統などの研究結果が踏まえられた頭注・傍注が備わり、別冊には提要および系図、年立などが纏められ、整備された注釈書の体裁をなしている。それ以後、安政五年(一八五八)に纏められた岡本保孝の著である『とりかへばや物語考証』よりも、光中校訂本の記述は詳しく、注目に値する。

本稿ではこの光中校訂本の本文に着目し、その特色と伊藤光中の校訂態度を明らかにしたい。

一 伊藤光中の本文校訂態度

光中校合本の特色の一つに、『とりかへばや』諸本の中でも群を抜いて多い異本注記を有していることが挙げられる。本文には、奥書に見える文政八年の「兩本」を「イ(朱)」として、文政十年九月の「異本」は「イ(墨)」、「泊沼翁翁藏本」は「ハ」及び「泊」として異本注記が残っている。他にも「森嘉基校本」が「森」、「児玉氏校本」が「児」として合計五種類の異本注記が存在する。

本文を校訂するにあたって、光中はこれら光中校合本内の多数の異本注記から最適なものを選択するという方法を採用している。一つ、例を挙げてみよう。女君と宰相中将が契りをかむすことになつた後、歌の贈答が行われた場面である。まず『新編日本古典文学全集』²⁾

から該当箇所を挙げる。

まして思へ世に類なき身の憂さに嘆き乱るるほどの心を

げにと、待ち取り、ほろほろといとど泣かる。暮るる、すなはち、右の大殿におはしたれど、中納言、いと人目あやしかるべきに、出でてだに会ひなば逃れやらんようなしと。(巻二・二七八頁)

七八頁

冒頭の女君の和歌を宰相中将が受け取った後、「げにと、待ち取り、ほろほろといとど泣かる。」とその心情・様子が描写され、続く「暮るる、すなはち」から夜を待つて宰相中将が女君の許へ訪れる場面が続く。しかし、この網掛けをした「泣かる。暮るる、すなはち」とある箇所は、今までに紹介された諸本の多くは「なかる、すなはち」になつており、「泣かる。暮るる、すなはち」とある本文は『新編日本古典文学全集』底本の初雁文庫本を含め二本しか報告されていない。当該箇所は夜を待つて宰相中将が訪れる場面のため、文脈上「なかる、すなはち」より、「泣かる。暮るる、すなはち」の方が優位といえる。この部分、光中校合本では、

七トナリイイ森

ハ中得心
げにと待とりほろくといとど泣かるト句すなはち右の大殿

二マ 上文 上文一 とゝなかるくるゝ見

(ゴシツク体は朱文字部分を示す。以下、引用部分は同じ。) (光中校合本 卷二 一四ウ)

「泣かるゝすなはち」という本文に「なりすなはち」「なかるくる

ゝすなはち」という二種の異本注記が残されている。これが光中校訂本になると、

げにと待とりほろくといとどなかる、くるゝすなはち右の大殿 (光中校訂本巻二 一三四)

となつており、光中は「なかる、くるゝすなはち」という優位の本文を採択している。このように光中校訂本の本文は校合結果内から最適なものを選択するという方法で校訂されている。しかし光中校合本の頭注傍注の中には、校合結果に納得できずに自説を注記してある箇所も少なくない。それらの箇所はどのように対処しているのだろうか。

本文の不審点を指摘した注記の中には、校合結果のどれが最適なかを論じた注記と、校合結果を見ても猶不審と判断した際の注記とがある。それらは必ずしも光中自身の注記だけではなく、校合本にあった注記を書写したものも存在する。しかし、校合本からの注記を書写するかは光中が取捨選択しているのであるから、光中校合本内の本文に関する不審注記は、光中が考慮する必要有りと判断したものと考えられる。では、それら指摘があつた箇所を見ていこう。

①

光中按思う給へて 心ほそきかなしきは誰にかは○と思ひ給
なんとありしてを くてイ
ぐと誤しなるへし 一トイ
イトシ
トイへるなんといふもことわりなれば 句

— (光中校合本卷三 十八才)

本文、「思ひ給へるなん」の見せ消ちされたる」の横に「くイ」と二種類の異本注記がある。頭注では「く」は「て」の誤写であろうとし、「思ひ給へてなん」が優位と判断している。光中校訂本ではこの箇所は「思ひ給へてなん」(光中校訂本卷三 十五ウ)となっており、注記通りに本文が採択されているのがわかる。続いて、校合結果に納得できず代案を示している例である。

②うちたへ

光中按宇治にはを 見給ふもをこなりや 打たへいかで吉野の
写し誤れる歟又を うち絶イ初ウ

りはへの誤か

山に人奉りにしがなと思

(光中校合本卷三 四一才)

本文「打たへ」を「宇治には」、又「打」と「折」の字の類似から「をりはへ」の誤写ではないかと推測している。卷三のこのあたりは、物語展開が京・吉野・宇治の三箇所をわたって展開する。場面転換の際はよく「吉野には」「宇治には」という書き出しで場面が切り替わることが多く、当該箇所も転換場所に位置し、京にいる宰相の中将の描写から「打たへ」で宇治にいる女君に焦点が切り替わる。それ故「宇治には」という代案を記したと思われる。』とりかへばや」諸本を見ると、この箇所を「宇治には」とする写本もあり、それら以てここを「宇治には」とする現代注釈書や、光中案と同じように「うちたへ」は「宇治には」の誤写であろうとして「宇治には」と

する現代注釈書も存在する。しかし、諸本の圧倒的多くが「うちたへ」であり、「うちたへ」を女君の描写とすれば、「(女君は)ひたすら吉野に使者を差し上げたいと思うあまり」と解釈できることから、注釈書の多くは「うちたへ」で解釈している。この箇所を光中校訂本では、

②みたまふもをこなりや、うちたへいかで吉野のやまに人奉りにしがなと思ふ 不審

(光中校訂本卷三 三三才)

と代案で示した「宇治には」と「をりはへ」は用いず、「うちたへ」を採用し「不審」と傍記している。己の代案があつても、あくまでも本文は校合結果内から採択するという態度を崩していない。

光中校訂本では、光中校合本にある不審注記をうけて、幾例か傍注等に「不審」「歟」「脱文あるへし」など光中校合本の注記内容を簡略化して残してはいるが、安易に本文を代案で改竄するようなことはない。光中校訂本の序文には「これかれあまたの本ともこうかへあはせつつあまれるをけつり脱たるをおぎなひ」と本文の校訂態度に触れた記載がある。しかし、それは校合の結果内で最適なものを選択するという増補・削除であり、自身で都合のよいように安易に本文を改竄するものではなく、あくまでも校合結果を尊重するという態度が窺えるのである。

二 光中校訂本の特徴

校訂態度に関わる光中校訂本本文の特徴として独自異文の存在が挙げられる。ここでいう独自異文とは、現在までに本文全体が紹介されている諸本にはない異文をひとまずそう称することにする。光中校訂本には十数字から中には六十文字以上に及ぶ長い独自異文が存在する。その長文の独自異文は卷二・卷四を通じて、十数箇所にもわたる（光中校訂本は卷一を欠く）。例を挙げれば次のようなものがある。

宇治に在る女君が兄弟である男君との再会を果たすために乳母に便宜をはかるよう頼む場面である。最初に『新編日本古典文学全集』から本文を挙げる。

中納言はかの御心地のいみじきにも心惑ひて、「その乳母に、「はらからにてもものしたまふ人の忍びておはしたるを、人にも知らせずいみじく忍びて対面せんと思ふに（以下、略）」

（卷三・三七二頁）

諸本では「中納言は」から四の君の容態に心惑う宰相中将が描写され、すぐ後に「その乳母に」と乳母に兄弟再会の便宜を頼む女君の台詞が続く。しかし、「心惑ひて」「その乳母」あたりの文脈がうまく続かないため、いく本かの写本の注記や現代注釈書において脱文の存在が指摘されてきた箇所である。この箇所に光中校訂本では異文が存在する。

中納言はかの御こゝちのいみじきに心まどひて京にのみとどまりおはしてひさしく音もせず、さてはよきをりしもあれ、そのめのことにはらからにてもものしたまふ人の忍びておはしたるを、人にもしらせずいみじく忍びて対面せんと思ふに

（光中校訂本卷三 三九才）

傍線部分の三十一文字が独自異文にあたる。「京にのみく」からなる異文によって、宰相中将が四の君のいる京に滞在していること、そのため宇治には音信さえもないことが述べられ、文脈上違和感なく、男君との再会・宇治からの脱出という今後の展開につながる。このような他本に見出せない本文には、その多くが登場人物の行動を具体化する本文で文意が取りやすくなるという利点がある。このような十数カ所におよぶ独自異文のほとんどを、光中は光中校訂本に採用している。

しかしながら、文意の通りやすさを重要視するあまり、転写の過程では派生しえない本文を作ってしまったきらいがある。卷三、男君が失踪した女君を心配する心中描写の場面である。諸本本文では次のようにある。

ただ二人ありつるに行方なくなりぬるいみじきこそ、男の様に
て世に交じらひしかど、思ひとくには、女の様にて世に交じら
ひしかど、いかなる世界に行き隠れいづれの野山に跡を絶えた
まふらん（『新編日本古典文学全集』、341頁）

現代注釈書ではこのあたり文意が取りにくいとされる。「男の様」云

々には敬語があり、「女の様」云々にはそれが無いこと、さらに前後に「こそ」の表現が多いことから目移りによる脱文の可能性も指摘されている。該当箇所を光中校合本で確認すると二種の異本注記が施されている。

△さこそを駈うへさこ	たゞふたり有つるに行ゑなく成ぬるいみ
そおほしなげかれんイ	し△ま十七男のさまにて世にまじらひ給
◎思 <small>ほ</small> ひ <small>出</small> には女 <small>の</small> さま	ひにしかかど◎いかなる世かに行隠いつ
にて世にまじらひ給ひ	れの○山 <small>野イ森</small> に跡 <small>地</small> を給給ふらん
しかとイ	(光中校合本卷三、二一ウ)

最初の△で示される異文注記は諸本本文に見いだせない。一方、◎の異文注記は諸本本文のほとんどが有している。さらに、本文◎の上三文字と異本注記最後の三文字が「しかと(ど)」であることを考へても、光中校合本本文が元々目移りによる脱文が生じた本文であったとみてよい。さて、この箇所が光中校訂本になると、

なりぬるいみしさこそを駈うへさこそおほしなげかれん、男の
さまにて世にまじらひ給ひしかど、いかなる

(光中校訂本・一九オ)

としており、諸本本文に見いだせない△の異文注記を取り入れ、多くの諸本が有する◎の本文は取り入れていない。両本とも取り入れるならばそれは「イ本」の本文になるうが、一方のみを取り入れたために、自然には派生しえない本文となっている。本文の改竄は行わず、異文注記の採択によつて校訂本を作成した光中であるが、こ

こではその意図に反して、新たな本文を作る結果になっている。しかしながら、諸本において、光中校訂本の転写本か否かを見分ける際にはここが一つの目安となるだろう。

すでに述べたように、これら長文の独自異文は全て光中校合本に残された異文注記に存在するが、それは五種の異本注記のうち一本ないし二本の校合本しか有していない本文である。その多くを光中校訂本で取り入れていることを見ても、光中の意図は祖本本文を復元するというところにはなく、文意の通り易い本文の再現にあったことは間違いない。結果的に新たな本文を作り出してしまつている箇所はあるが、光中としては本文を改竄する意図はなかつたといえよう。

三 光中校訂本の異本注記

現存する光中校訂本の巻二から巻四には、全体にわたる「イ」
とする異本注記が見られる。全体を通じて353例あるが、このイ本注記が何の写本によるものかは明記がない。巻一が揃つていけば、或いは冒頭に記載があつたかもしれないが、現在ではこれらが光中の手によるものかどうか定かではない。しかし、これらを光中校合本の本文・異本注記に当てはめてみた場合、奇妙なことが判明する。

次ページの表は光中校訂本の異本注記が光中校合本の本文・異本注記のどれに当たるかを数値にして計上したものである。

光中校合本における書写元	総数値	他の異本注記と合致しない数値
元々の本文	160	160
イ(朱)〔両本〕	74	55
イ(墨)〔異本〕	111	87
ハ・泊〔泊泊舍翁藏本〕	4	3
森〔森嘉基校本〕	50	9
児〔児玉氏校本〕	5	3

※総数値は、該当書写元が全体で何例になるかを挙げたもの。その数値から他の異本注記と合致しない数値を引いたものが最終段の数値である。

まず第一に、光中校訂本の異本注記の本文は、すべて光中校合本に存在することが確認できる。さらに表から、基本的には光中校訂本の異本注記は光中校合本の「元々の本文」(光中校訂本底本は俊明本)が多いことがわかるが、他にも「イ(朱)」や「イ(墨)」、「森」も高い数値を占める。表の最下段、他の異本注記と合致しない書写元単独の数値を見ても、「イ(朱)」と「イ(墨)」の数値は高い。つまり、光中校訂本の本文が光中校合本の異本注記を組み合わせた混合本であるように、光中校訂本の異本注記も同様の特色を有しているといえる。前項において光中校訂本は諸本にはない長文の独自異文を有することを述べた。光中はこれら独自異文のほとんどを光中校訂本において採用しているが、それはすべてではない。その本文に

採択されなかつた残りの一部が異本注記に見られるのである。

つまり、諸本にはない独自異文の一部だけを有しながら、他写本の特徴をも有する本文が光中校訂本の異本注記であるといえる。果たしてこのような写本が存在するだろうか。断言はできないが、可能性は極めて低い。それよりも、光中が校訂本を作る際に迷った異文を書き残したものが光中校訂本の異文注記であると考えの方が自然ではないか。今後、光中校訂本の異本注記と一致する本文が報告されれば別であるが、ひとまず、今は光中自身が本文校訂を行なう過程で書き残したものが光中校訂本の異本注記であると見ておきたい。

おわりに——諸本間での位置付け——

先学諸氏の詳細な調査により『とりかへばや』諸本は比較的新しい近世以後の共通祖本から分かれたものと言われ、おおよそ四系統に分類して考えるのが一般的になっている。すなわち、伊達家旧蔵本などの比較的古態を残すとされる甲類、甲類を補うことのできる乙類、山岡凌明の改訂があると思われる写本群の丙類の三系統と、その後、甲・乙・丙いずれにも属さないものとして立てられた丁類の合計四系統である。また、これら諸本間の異同はごくわずかで異本と認められる程の大きな差異はないということも一般的な認識になりつつある。このような状況のなかで、長文の独自異文を多数有する光中校訂本は注目に値しよう。独自異文に関して諸本の大多

数が有していない本文である以上、祖本にその本文が存在したとは考えがたいが、近世期において『とりかへばや』本文がいかに読まれ、どのように享受されてきたかを考える上では極めて興味深い本文であるといえる。その意味で、同じく長文の異文を有する写本として桑原博史氏^{（1）}によつてその一部分が紹介された筑波大学蔵本との関係も興味深い。両本には同様の独自異文が存在したり、異文そのものが完全に一致はしないものの共通箇所^{（2）}に独自異文が存在するなどの類似が見られる。近世期において『とりかへばや』の本文は現在の認識よりもはるかに多様な様相を呈していたらしい。さらなる諸本本文の丹念な検討が求められよう。

このような現状の中、光中校訂本を諸本分類においてどのように位置付けるべきか。検討したように光中校訂本は複数の異文注記が混在した混合本であるから、現状の四系統のいずれかに属するものではない。新たに一系統を立てるべきであろう。ひとまず「伊藤光中校訂本系統」と称したい。現在、光中校訂本の転写本は確認できていないが、『浜松中納言物語』や『堤中納言物語』など光中蔵書を複製書写していることが知られる岩下貞融^{（3）}の付近などで確認できる可能性はある。

以上、『とりかへばや』諸本本文の様相を正確に把握するには、さらなる検討が必要であらうことを指摘して筆を置きたい。

〔注〕

- 〔1〕寛政四年（一七九二）生、天保五年（一八三四）七月八日没。上野国沼田藩士。清水浜臣の門人。著作に『新撰字鏡捷見』『銘石の落葉』『ひらめ石の長歌』などがある。猶、伊藤光中の伝記、及び静嘉堂本と桃園本の関係については、拙稿「伊藤光中の『とりかへばや』研究―桃園文庫本・静嘉堂文庫本を中心として―」（『古代中世国文学』第二十七号 平成十六年一月）にて論じている。
- 〔2〕石壁敬子氏『新編日本古典文学全集 とりかへばや』（平成十四年小学館）。
- 〔3〕初雁文庫本・宮内庁書陵部蔵御所本の二本。また『とりかへばや物語 本文と校異』によると、岡田真澄氏旧蔵本は「いとゝなかるくるゝ」とあるという。
- 〔4〕この箇所の優位性については石壁敬子氏が前掲注〔2〕の解説において論じておられる。
- 〔5〕『とりかへばや本文と校異』（鈴木弘道氏 大学堂書店 昭和五十三年）に記載される吉沢義則博士蔵本（『全訳王朝文学叢書』第十二巻）と「りかへばや物語」の頭注に見える「異本」。
- 〔6〕鈴木弘道氏『とりかへばや』校註編（笠間書院 昭和四十八年）。
- 〔7〕田中新一氏 田中喜美春氏 森下純昭氏『新釈とりかへばや』（風間書房 昭和六十三年）。
- 〔8〕内閣文庫本には、「心まどひの下に中納言は京へおはしてこゝにはお

はせぬなどいふ事のもれたるにや異本可考」と傍注があり（鈴木弘道氏『俊明本とりかへばや』（むさし書房 昭和四十四年）、横山由清筆本には傍注に「イ二字脱」と注記がある（『とりかへばや 本文と枚異』（鈴木弘道氏 大学堂書店 昭和五十三年）。また、「その」と「乳母」の間に脱文あるかとする現代注釈書や、文脈に違和感があるとする現代注釈書などがある。

(9) 『とりかへばや』の諸本分類は以下の先行研究により明らかにされてきた。

吉田幸一氏 『とりかへばや上』（昭和三十六年 古典文庫）

桑原博史氏 『とりかへばや物語諸本解題』（『中世物語の基礎的研究

資料と史的考察』（昭和四十四年 風間書房）

鈴木弘道氏 『とりかへばや物語の研究』校注編（昭和四十八年 笠間書院）

『新釈とりかへばや』（田中新一氏・田中喜美春氏・森下純昭氏 昭和六十三年 風間書房）

(10) 前掲注(9)の桑原博史氏著作。

〔付記〕資料の閲覧をご許可下さった静嘉堂文庫、東海大学付風図書館、及びその関係者の方々に記して厚く御礼申し上げます。

——あらい・かずみ、広島大学大学院博士課程後期在学——